

ケイン樹里安  
2019年4月19日

2017年にオンライン版として復刊してから3号目の『市大社会学』第16号が完成いたしました。書評2本、書評リプライ1本、そして今号からの新たな取り組みとして、優秀卒業論文1本を加えた誌面となりました。前号と比べますとコンパクトな分量ですが、まずは無事に発行できたことに安堵しております。寄稿者の方々に改めて御礼申し上げます。また、今号の佐藤氏の書評と松井氏の書評リプライは、書評検討会を行ったのちに、執筆して頂いたものです。佐藤・松井両氏に加え、検討会にお越しいただいたみなさまにも改めて御礼申し上げます。

さて、周知のとおり、『市大社会学』の「市大」とは、当然ながら大阪市立大学を略したものです。2019年4月1日にプレスリリースがなされたとおり、すでに大阪市立大学は大阪府立大学と共に公立大学法人大阪として再編されました。この再編は、大阪市という都市が、その在り方を大阪市民・府民に問われた状況に埋め込まれています。メディアとしての『市大社会学』はいかなる媒体であり続けることができるでしょうか。

むしろ、『市大社会学』はいかなるメディアであったのか、と過去形で問うことも有意義かもしれません。こうした問いを發しますと、今から70年前、大阪市立大学社会学教室が創設された1949年から現在までの不連続な軌跡を遡ることが必要となりますが、紙幅も限られておりますので、ひとまず、創設から50年目を迎えた1999年から動き出し、2000年3月に刊行された『市大社会学』第1号「創刊の辞」で示された「危惧」を振り返ることにとどめます。創刊の辞における「危惧」とは何かと申しますと、「ジンメルが百年前にいみじくも予言したように、成熟した資本主義があらゆる社会関係の意味を貨幣、流行、モード、ファッションへ還元し尽くさんとするとする意志を貫徹させている現在」において、「社会学もまた総じてかかる趣を呈していることに、われわれは強い危惧の念を抱くものである」という文章に登場する「危惧」のことです。創刊の辞では、「われわれ」は「良き伝統」を受け継ぎながら「流行や独りよがりのテーマをくるくる追い回すよりも、民衆が切に求めている問題の解明」に「腰を据えて」取り組むべきであり、それこそが築き上げられてきた『市大社会学』の「アイデンティティ（存在証明）」である、と述べられています。

しかしながら、「民衆」から問いが突き付けられた今だからこそ、「伝統」を継承するだけでなく、「危惧」のただなかへと身を投じることでアイデンティティなるものを再検討してもよいのかもしれない。なぜなら、それこそジンメルが『社会学の根本問題』において「社会はいわば実体でもなければ、それ自体具体的なものでもなく、むしろ生起であり、ある人の運命と形態とについての、他者の側からの受動と能動の作用である」という一節を書き残しているからです。「独りよがりのテーマ」であっても、それを「くるくる追い回」さざるをえない状況が「他者の側からの受動と能動の作用」のためにわたしたちの眼前に広がっており、それを的確に「追い回す」なかで「ある人の運命と形態」を左右する社会的なものが「生起」するさまを明らかにすることも、実は意義深いのではないのでしょうか。

改正入管法が施行された4月1日に平成の「流行」歌を引用しつつ新元号が発表され、続いて、復興を掲げる東京五輪を目前に発表された新一万円札の裏に被災地ではなく東京駅が、表の肖像画には植民地政策時の「貨幣」の顔となった実業家が描かれていました。その歌のメロディや歌詞、やがて紙幣も「民衆」の耳と目と手に届く。そういったことは、「民衆」が「切に」解明を求める問題ではないと言い切れるのでしょうか。人々に問いを付される側である「われわれ」は、そもそも「民衆」の問題に「腰を据える」ことができているのでしょうか。

『市大社会学』にどのような前途があるにせよ、研究成果を世に出すためには、トレーニングとそれを可能にする対話の契機が必要です。さらなる模索や工夫を重ねながら、次号に向けて活動を継続する所存です。大学の名称と都市の行政区分が問い返されるなかで、あえて『市大社会学』という看板を掲げ続けるメディアを、今後ともどうぞよろしくお願い致します。